

ラフマニノフ生誕150年 ホロヴィッツ生誕120年  
クラシック黄金時代のニューヨーク

# 江口 玲

ピアノリサイタル



2台ピアノ共演  
Eri Kang (姜愛里)



1912年製 (CD75)



1932年製 (ラフマニノフ)

2023 **6/19** (月)

19:00開演 (18:30開場)

5,000円 (全席指定)

浜離宮朝日ホール

東京都中央区築地5丁目3-2 03-5541-8710  
築地市場駅 A2出口から徒歩約4分

《プログラム》 \*2台ピアノ共演 Eri Kang (姜愛里)  
スミス/ラフマニノフ編: アメリカ国歌  
コルリッジ テイラー: 深い河 Op.59-10 ア・バ・ボレキ・ヌワナ Op.59-4  
ガーシュウィン: 7つの前奏曲  
ガーシュウィン/グレインジャー: ポーギーとベス (2台のピアノのための幻想曲) \*  
クライスラー/ラフマニノフ編: 愛の悲しみ 愛の喜び  
ラヴェル: スペイン狂詩曲 (2台ピアノ) \*  
ガーシュウィン/江口編: ラプソディ イン ブルー  
(プログラムは変更の可能性があります)

TAKAGI KLAVIER INC.

● 主催・お問い合わせ タカギクラヴィア株式会社 Tel.03-3770-9611 <http://takagiklavier.com/>  
● チケットお申込み タカギクラヴィア株式会社 イープラス <https://eplus.jp/>

## ラフマニノフ生誕 150 年 ホロヴィッツ生誕 120 年



若き日のホロヴィッツ

今回のコンサートで使用する2台のピアノは、ホロヴィッツが初来日で使用した 1912 年製《CD75》と、ラフマニノフがスタインウェイ社から贈られ自宅で使用していた 1932 年製のスタインウェイである。ホロヴィッツが 1928 年にアメリカに初めて渡って真っ先に実現したかったことは、崇拝するラフマニノフとの対面であり、それはニューヨーク着後わずか 48 時間後の 1 月 8 日、西 57 丁目スタインウェイ本社のコンサートグランドピアノが並ぶベースメントで実現した。ホロヴィッツはその時の思い出を「あんなに偉い方が、自作の第 3 番協奏曲で、若僧の私の伴奏してくれるなんて。一生で一番忘れえぬ印象だった。」と語っている。このスタインウェイ社での歴史的な共演時、ホロヴィッツは 25 歳、ラフマニノフは 55 歳。それ以来、二人は友情を深め互いを尊敬していた。

### 【歴史を創ったニューヨーク・スタインウェイ】



左:ラフマニノフ 中央:ディズニー 右:ホロヴィッツ

19 世紀に入るとヨーロッパでは紛争、貴族階級の解体等でパトロンが減少し、芸術家を取り巻く環境は激変した。その頃、アメリカは経済的に大成功を収め、新大陸を目指して、ヨーロッパ中から移民が押し寄せることになる。そしてクラシック音楽が最先端のエンターテインメントとなり、観客から入場料を徴収し、その売り上げで興業をまかなうというショービジネス形式がクラシックにも適用され、必然的に大ホールで演奏するスタイルへと変わっていった。「貴族がスポンサーとなりサロンで演奏会を開く」という長年続いてきたヨーロッパの室内楽スタイルは消滅することになる。しかし、アメリカの大きなホールでは、ヨーロッパ老舗メーカーのピアノは音量不足で聴こえなかった。そこに登場したのがスタインウェイ・ピアノだ。ドイツではほとんどピアノ作りの実績を残せないまま初代スタインウェイ・ファミリーはシヨパン没の翌年の 1850 年、53 歳の時、渡米して息子たちとともに新天地でピアノの製造を始め、1853 年、Steinway&Sons 社をニューヨークに創立。その後、自由とお金を求めてニューヨークに集まってきた、後に巨匠と称されるロシアやヨーロッパの作曲家ピアニスト達がピアノに求めた音色、タッチ、反応に加え大ホールでも負けない音量を求めて従来のフォルテピアノに改革的な構造変更を施したピアノを開発、膨大な数の特許を取得して近代ピアノの構造を完成させた。

### CD75 (1912 年製)

1912 年 6 月 19 日生まれ 製造番号 #156975。  
ホロヴィッツが最も愛した伝説の楽器として有名。晩年の全米ツアーの他、1982 年のロンドン公演、1983 年の初来日 NHK ホールでも使用された。  
良く鳴る枯れたボディーと弦圧の低い響板。これにより響板のダンパー効果が弱いため、サステーンが長い。特にピアノシモの音の延びは特筆すべきで、これにより表現力の豊かさが格段に広がって、整音の効果も十分発揮される。低音域から高音域に至るまで各セクションの鳴りムラもないので、驚く程音量バランスが良い。これはピアノ本体の性能であり、このどれが欠けても名器と呼ばれる楽器にはなれないが、この CD75 のボディーはその全てを持ち合わせた類まれな名器である。

### ラフマニノフ (1932 年製)

ラフマニノフが、晩年の 10 年間、ニューヨークの自宅に所有していたピアノ。  
ウエストエンド・アヴェニューに住んでいた 1932 年から 1942 年ビバリーヒルズに居を移すまでの間、ピアノ協奏曲第 4 番や交響的舞曲の作曲、またそれまでに作曲した作品の改訂をするなど、数多くの作曲に使用されており、「ラフマニノフのピアノ」として最も有名な楽器である。  
このピアノはその後バーバーが所有し、ソナタ第 1 番などを作曲した。  
バーバーのソナタ第 1 番は、1948 年に作曲され 1950 年にホロヴィッツ が世界初演している。ホロヴィッツは何度かバーバーの家を訪ね、作曲途中のソナタについて「終楽章をフーガにしたほうが良い」とバーバーに助言したという記録が残っている。Tai Hasegawa 氏所蔵。

## 江口 玲 | ピアノ

Akira Eguchi | Piano



東京藝術大学付属音楽高校を経て東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業、その後ジュリアード音楽院のピアノ科大学院修士課程、及びプロフェッショナルスタディーを終了。1992 年に大成功をおさめたニューヨークデビューリサイタル以来、アメリカ、ヨーロッパ、アジアでの主要演奏会場にて演奏を続けてきた。世界各国でのリサイタルや室内楽、協奏曲などで活躍しているほか、ギル・シャム、アン・アキコ・マイヤース、諏訪内晶子、竹澤恭子、渡辺玲子など、数多くのヴァイオリニストたちと共演している。レコーディングでは計 60 枚以上の CD を録音、NYS CLASSICS よりリリースされている 15 枚のソロアルバムも、「レコード芸術」誌で特選盤に連続選出されるなど、高い評価を得ている。2011 年 5 月まで、ニューヨーク市立大学ブルックリン校にて教鞭を執る。現在、東京藝術大学ピアノ科教授、及び洗足学園音楽大学大学院客員教授を務めるほか、ニューヨークと日本を行き来して演奏活動を行っている。  
オフィシャル・ウェブサイト <http://www.facebook.com/Pianist.Akira.Eguchi>

## 姜 愛里 | ピアノ

Eri Kang | Piano



桐朋学園高校音楽科を経て同大学を卒業。ピアノを徳丸聡子、室内楽を岩崎淑、故数住岸子の各氏に師事、卒業後にニューヨークに移住して、ジュリアード音楽院の大学院修士課程を卒業。ジュリアード在学中よりソロ、室内楽と幅広く活躍し、カーネギー・リサイタルホールにてデビュー・リサイタルを行い、その後も世界中で演奏活動を行っている。特に、弦楽奏者との共演では定評があり、著名な演奏家と度々共演。故ドロシー・ディレイ女史のアシスタント・ピアニストとしての実績を元に国際コンクール入賞者を多数支え、公式伴奏者としても評価が高い。現在はニューヨーク市立大学にて教鞭を取りつつ、演奏活動を行っている。